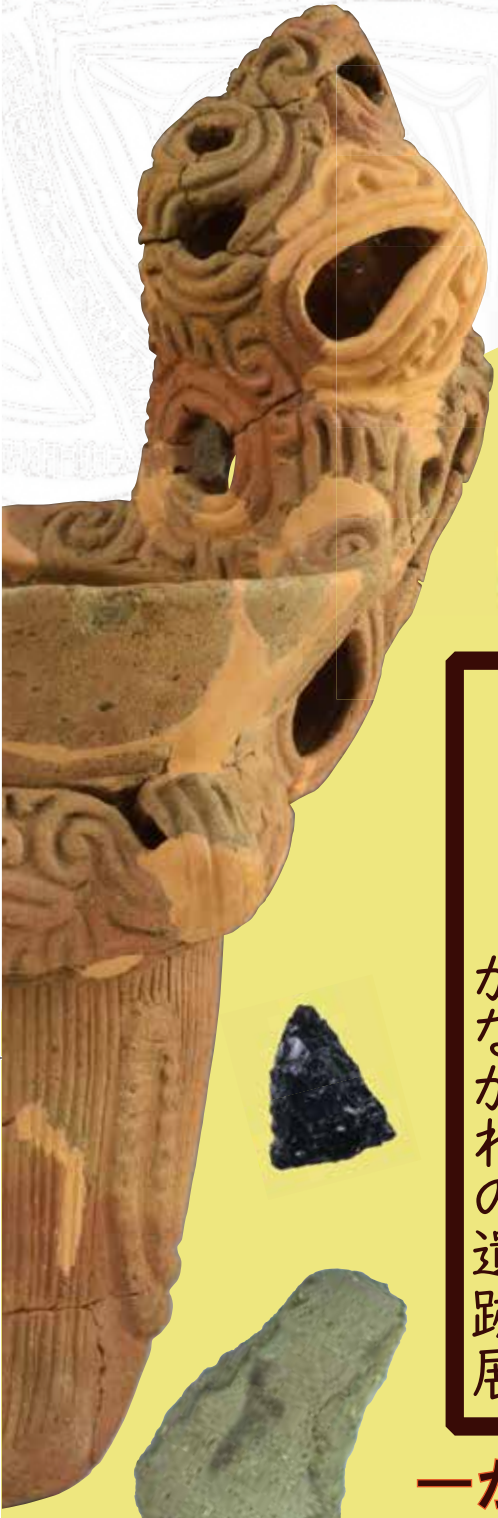


令和六年度

かながわの遺跡展

縄文のムラの繁栄

―かながわ縄文中期の輝き―

主催：神奈川県教育委員会・(公財) 横浜市ふるさと歴史財団・秦野市教育委員会

ごあいさつ

今から約 5,500 ～ 4,500 年前の縄文時代中期は、一万数千年に及ぶ長い縄文時代の中でも、もっとも繁栄した時代と考えられています。この時代、海・山・丘陵といった変化に富んだ地形や豊かな自然環境に恵まれたかながわの地では、多くの集落〈ムラ〉が営まれました。

神奈川県は、1905（明治 38）年に横浜市神奈川区の三ッ沢貝塚の調査で、N･G･マンローによって、初めて竪穴住居が発掘･報告された地であり、縄文時代集落研究の出発点となりました。また、県内では、1970 年代以降、横浜市都筑区の港北ニュータウン遺跡群をはじめとして、数多くの縄文時代の集落遺跡の発掘調査が行われ、東日本の縄文時代集落研究において、重要な役割を果たしてきました。

今年度のかながわの遺跡展「縄文ムラの繁栄ーかながわ縄文中期の輝きー」では、神奈川県内の縄文時代中期集落から出土した選りすぐりの品を展示し、県内各地の縄文ムラの様子をご紹介します。当時の生活を伝える魅力あふれる出土品をたっぷりとご覧いただき、活気に満ちた縄文社会の様子を感じていただければ幸いです。

令和 6 年 12 月

神奈川県教育委員会
公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団
秦野市教育委員会

目　次

縄文時代中期・繁栄の時代
はじめに 1
繁栄の時代の土器 1
Ⅰ．縄文時代集落研究の歩みとかながわ
縄文時代集落研究のはじまり 2
ニュータウン開発と遺跡群研究 3
大規模開発への対応 5
集落の一時的景観の復元 6
丹沢山麓の最新成果 6
遺跡を残し、伝える。 7
Ⅱ．縄文時代中期集落〈ムラ〉のすがた
環状になるムラ 9
「大きな」ムラ・「小さな」ムラ 11
ムラの中央の墓 12
土坑墓に供えられた土器と石匙 13
屋外に埋められた土器（埋設土器） 13
列石で区画する 14
廃屋墓 14
Ⅲ．縄文ムラ繁栄の背景
集落を取り巻く森と植物との関わり 15
低地での活動 17
海をのぞむムラ 18
謎の軽石製品 18
多彩な交流 19
集落で行われた専業的な活動 22
奥深き土製品の世界 23
小さな土器 24
土器に描かれるいきもの 24
土器に描かれるヒト 25
小さな土偶と祈り 27
大きな石棒と祈り 28
縄文ムラ繁栄の終わり
むすびに 28

例　言

・本図録は、令和 6 年度かながわの遺跡展「縄文ムラの繁栄ーかながわ縄文中期の輝きー」の展示図録として作成しました。
・本展示会は、神奈川県教育委員会（埋蔵文化財センター）・公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団・秦野市教育委員会の共同主催によるものです。
・展示会場と会期は次のとおりです。
　【横浜会場】横浜市歴史博物館　令和 6 年 12 月 24 日（火）～令和 7 年 1 月 26 日（日）
　【秦野会場】はだの歴史博物館　令和 7 年 2 月 4 日（火）～ 3 月 2 日（日）
・会期中に講演会を次のとおり行います。
　第 1 回　令和 7 年 1 月 11 日 (土)　高橋龍三郎氏（早稲田大学名誉教授・山梨県立考古博物館館長）
　　於：横浜市歴史博物館 講堂
　第 2 回　令和 7 年 1 月 25 日 (土)　谷口康浩氏（國學院大學教授）
　　於：横浜市歴史博物館 講堂
　第 3 回　令和 7 年 2 月 22 日（土）　井出浩正氏（東京国立博物館調査研究課考古室長）
　　於：秦野市立堀川公民館　多目的ホール
・本図録に記載した出土品等の所蔵・保管先について、神奈川県教育委員会所蔵のものは、記載を省略しています。
・遺跡名称等の記載は、表記の統一を除き、原則として報告書等の記載に従っています。

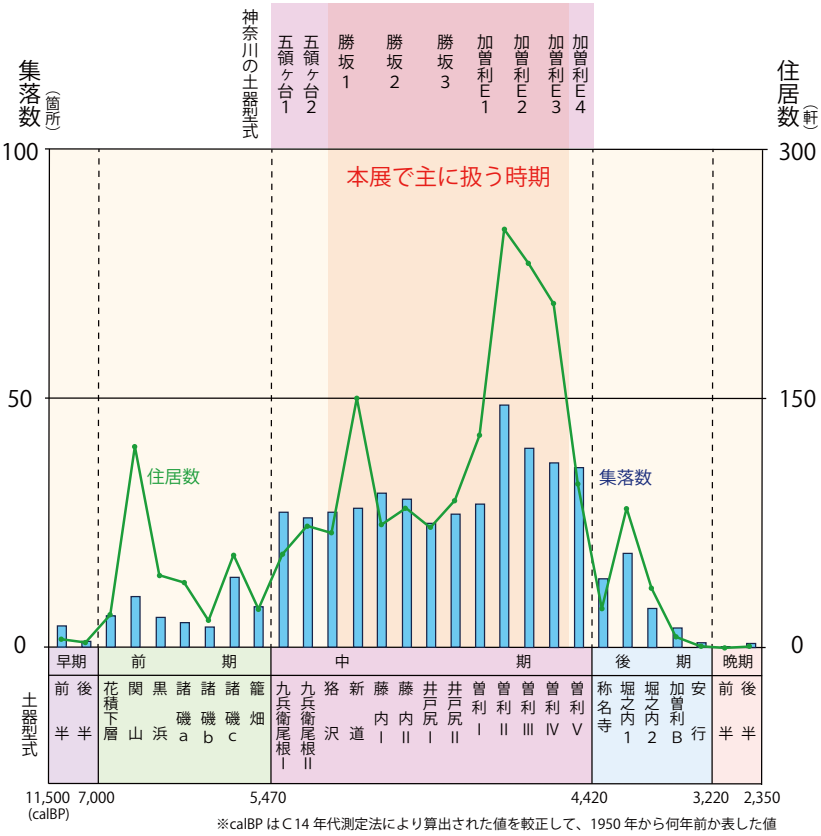
・本展示の企画・図録作成は、横浜市歴史博物館（担当 橋口豊）、秦野市文化スポーツ部生涯学習課（担当 横山諒人）の協力を得て、神奈川県教育委員会文化遺産課中村町駐在事務所（埋蔵文化財センター）の渡辺千尋が行いました。

縄文時代中期・繁栄の時代

はじめに

縄文時代中期は、一万数千年以上続いた縄文時代のうち、およそ 5,500 ～ 4,500 年前の時期に当たります。特に東日本では、縄文時代の中でも集落数・住居数が多いことが知られ、社会が繁栄した時期と考えられています。

本展では、縄文時代の人びとが暮らした集落〈ムラ〉を軸に、主に中期中葉から後葉の繁栄の様子を紹介します。



▲1　土器型式別にみた集落数と遺跡数の変化（八ヶ岳西南麓）

繁栄の時代の土器

中期の縄文土器には、華やかで力強い印象を与えるものが目立ちます。神奈川県内で用いられていた土器は、おもに中期前葉は五領ヶ台式土器、中葉は勝坂式土器、後葉は加曽利E式土器と呼ばれているものです。また、後葉には甲信地方の曽利式土器や多摩・武蔵野地域を中心に分布する連弧文土器も多く見られ、さらには、複数の型式の特徴を併せ持つような土器も見られます。特に中期中葉の勝坂式土器には、器面を埋め尽くすほどの文様や、把手に代表される複雑で過剰とも言える装飾が施されているものがあります。また、一人で動かすことが簡単ではないほどの大形の土器や、使い勝手を無視したかのような器形の土器、有孔鍔付土器や釣手土器といった特殊な土器が現れ、社会の繁栄ぶりが縄文土器の造形に反映されているかのようです。

▲勝坂式の深鉢形土器（厚木市・林南遺跡）

▲曽利式の水煙把手付き深鉢形土器（海老名市・上今泉中原遺跡）

▲加曽利E式の深鉢形土器（相模原市南区・当麻遺跡）

▲有孔鍔付土器（平塚市・上ノ入遺跡）

▲釣手土器（横浜市旭区・市ノ沢団地遺跡）

2　縄文時代中期の土器

Ⅰ．縄文時代集落研究の歩みとかながわ

神奈川県内での集落遺跡の調査は、東日本の縄文時代集落研究に大きな貢献をしてきました。集落遺跡の調査の歴史の中から、注目されるものをいくつか取り上げ、その歩みを見てみましょう。

縄文時代集落研究のはじまり

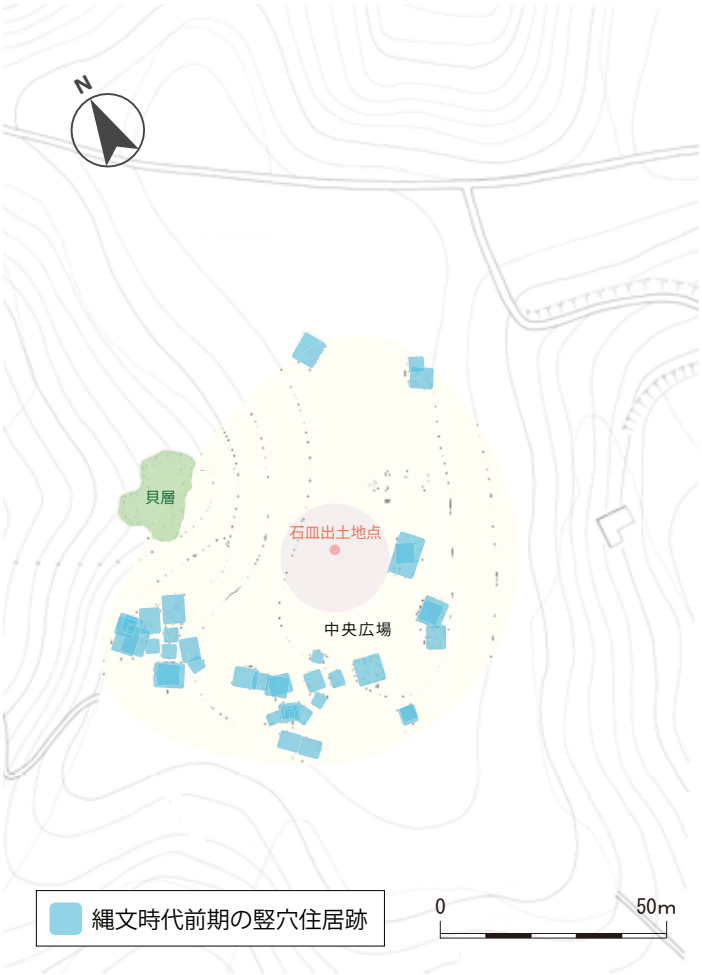
竪穴住居跡を初めて発掘調査したとされるのがN（ニール）・G（ゴードン）・マンローです。マンローは1905（明治38）年に三ツ沢（みつざわ）貝塚（横浜市神奈川区）の発掘調査を行い、炉跡（ろあと）と柱穴（ちゅうけつ）を発見、これが竪穴住居跡の初報告とされますが、その後の調査研究にすぐに結びつくことはありませんでした。

戦前の研究は、竪穴を残した人々が何者なのかという人種論争や、時間軸の基準となる土器編年の整備を目的とした研究が主流でした。調査も層位に基づいた検証に適したトレンチ調査や貝塚調査が主で、集落研究が行われるような段階ではなかったと言えます。

縄文時代の集落研究は、太平洋戦争後に本格化しました。1955（昭和30）年に横浜市史の編さんに伴い、和島誠一（わじませいいち）・岡本勇（おかもといさむ）らにより行われた南堀（なんぼり）貝塚（横浜市都筑区）の調査は、縄文時代前期の集落跡の全貌（ぜんぼう）が明らかにされた画期となる調査と評価されています。原始集落の構造を解明することを目的とし、台地のほぼ全体を発掘調査するという意図を持った最初の大規模調査でした。全景写真を見ると、台地上を縦断するように調査区を細長く設定し、住居跡が確認された場所を広げて調査をしている様子が分かります。和島らは、広場を中心とした縄文時代集落の環状構造は、強い規制によって統合（とうごう）された氏族（しぞく）集団の存在を表していると理解し、その考え方は、以後の集落研究に大きな影響を与えました。統合を象徴するかのように、集落の中央部分から大きな石皿が出土し、注目されました。

▲3　1955年調査の南堀貝塚

▲4　南堀貝塚出土の石皿



▲5　1955年調査の南堀貝塚全体図

このような集落遺跡の大規模調査は、1961（昭和36）年に行われた縄文時代中期～古墳時代の集落跡である三殿台遺跡（横浜市磯子区）で、ブルドーザーやベルトコンベアなどの重機が初めて導入され、まさに台地全体を丸ごと調査する方法が行われていきます。また、1969（昭和44）年に調査された潮見台遺跡（川崎市宮前区）は、中期後葉の集落跡で、台地全体の調査によって、住居跡12軒からなる集落が明らかになりました。こうした調査の積み重ねにより、台地の上の縄文時代集落の実態が徐々に明らかになっていきます。

▲6　1969年調査の潮見台遺跡A地区

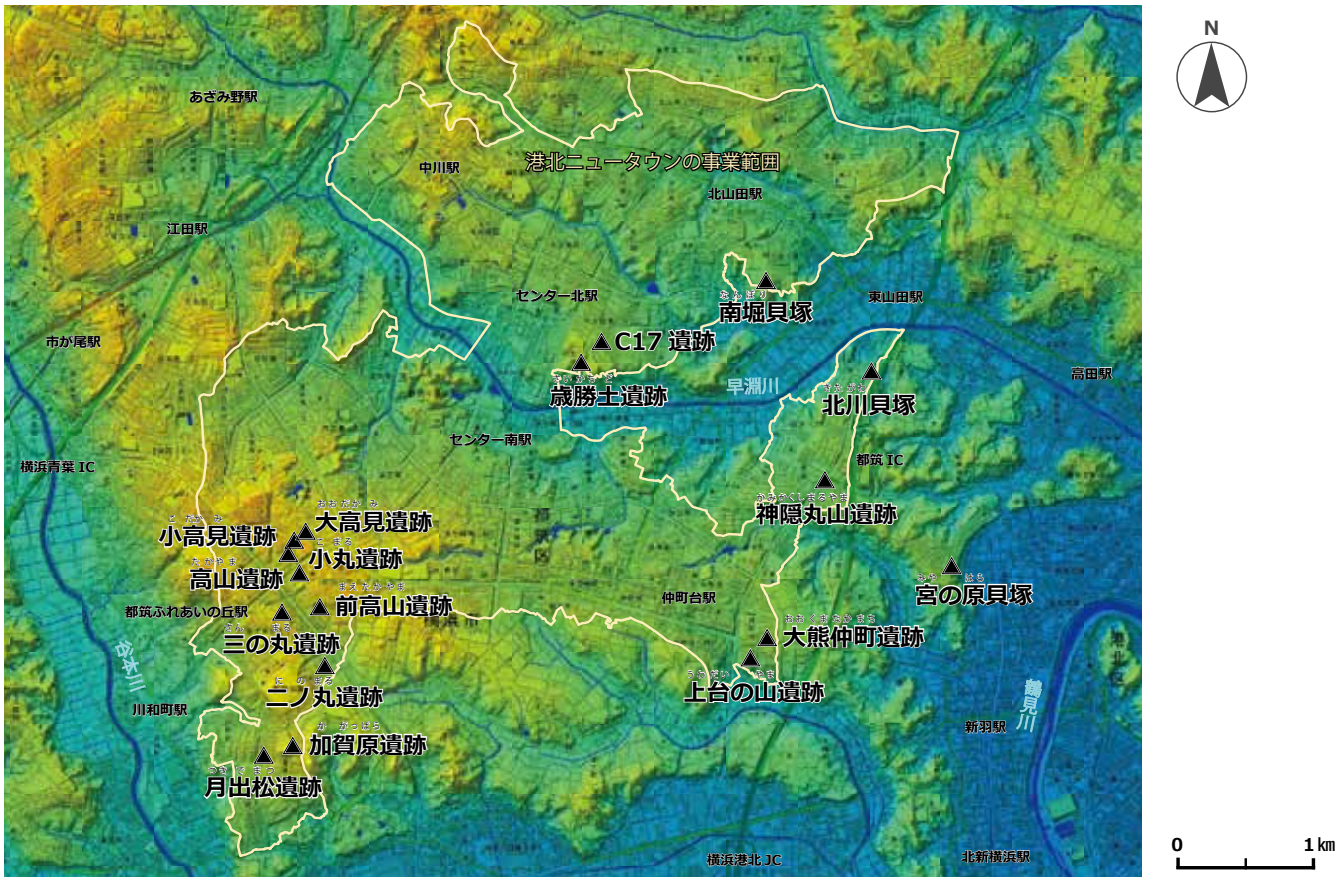
ニュータウン開発と遺跡群研究

高度経済成長期以降、大都市横浜の人口増加は著しく、横浜市の郊外は開発の時代を迎えます。1969（昭和44）年から始まった港南台遺跡群（横浜市港南区・榎戸第1遺跡ほか）の調査は、その端緒と言えるでしょう。

現在の横浜市都筑区に計画された港北ニュータウン（以下、「港北NT」）は、新規開発面積が約1,340ha、計画人口30万人の街を造るという非常に大規模な区画整理事業でした。1970（昭和45）年に港北NT調査団が組織され、遺跡の分布状況などを確認する予備調査が開始され、1972（昭和47）年からは、本格的に発掘調査が始まりました。予算や期間も十分とは言えない中で、それぞれの遺跡を単独ではなく、有機的に捉え、その社会構造や集団構成に迫る「遺跡群研究」の方向性が示され、その後20年近くにわたって発掘調査が行われました。その結果、三の丸遺跡、神隠丸山遺跡、大熊仲町遺跡など縄文時代集落が多数発掘された全国的にも貴重な地域となっています。1989（平成元）年に横浜市埋蔵文化財センターが発足し、調査団から事業が引き継がれ、現在も出土品等整理作業が継続されています。

▲7　榎戸第1遺跡出土の中期後葉の土器

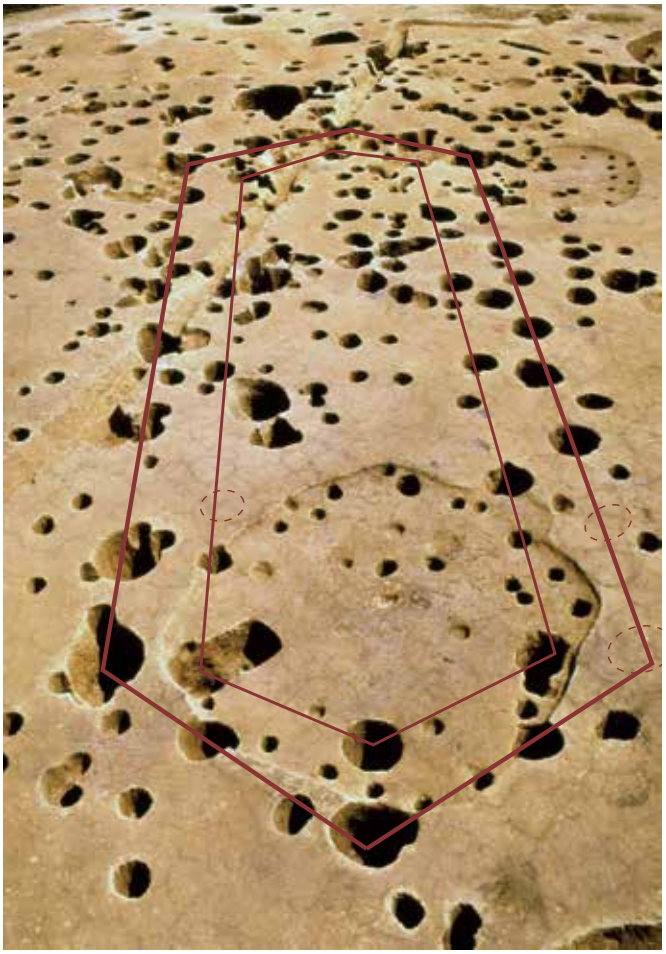
港北NTでは、広域に調査が実施され、遺跡の大小を問わず調査成果が蓄積されたことで、同時期に東京で調査された多摩ニュータウン遺跡におけるセトルメント・パターン論とともに、集落の領域や、遺跡の規模、性格についての研究に多大な影響を与えました。さらには、年間を通じて同じ場所に定住していないのではないかという考えから、集団の移動論といった研究上の重要な視点がもたらされました。また、小丸遺跡の調査からは、縄文時代集落で掘立柱建物の存在が初めて明らかになるなど、発掘調査に新たな発見があったことも重要でした。



▲8　本展で紹介する港北 NT 遺跡群の縄文時代遺跡位置図

▲9　三の丸遺跡 A 区南側住居跡群
港北 NT 遺跡群最大規模の集落。住居跡の重複が著しい。

▲ 10　神隠丸山遺跡全景



▲ 11　小丸遺跡の掘立柱建物跡
当初は遺構の性格が不明で「長方形 柱 穴列」と呼ばれていた。

大規模開発への対応

1970 年代以降、県内では道路や学校・ダムなどの建設、大型の土地区画整理など、公共事業に伴う発掘調査が各地で実施されていきます。公共事業が多く行われたことに加え、埋蔵文化財専門職員の採用など行政の体制整備が進んだことや、埋蔵文化財に関する制度の充実が図られた改正文化財保護法が 1975（昭和 50）年 10 月に施行されたことなどが背景にありました。

当麻（たいま）遺跡第 3 地点（相模原市南区）は、国道 129 号の整備に伴い、1974（昭和 49）年から発掘調査が行われました。それまでの調査に比べ、遺物が出土した位置の記録への注意が払われ、報告書に示された画期となる調査でした。その後、土地区画整理事業に伴い、1989（平成元）年に西側に隣接する範囲が田名花ヶ谷戸（たなはながやと）遺跡として調査され（2 次調査）、2021（令和 3）年から東側に隣接する範囲が第 4 次調査として発掘調査されました。これにより、環状集落の大部分が明らかになりつつあります。

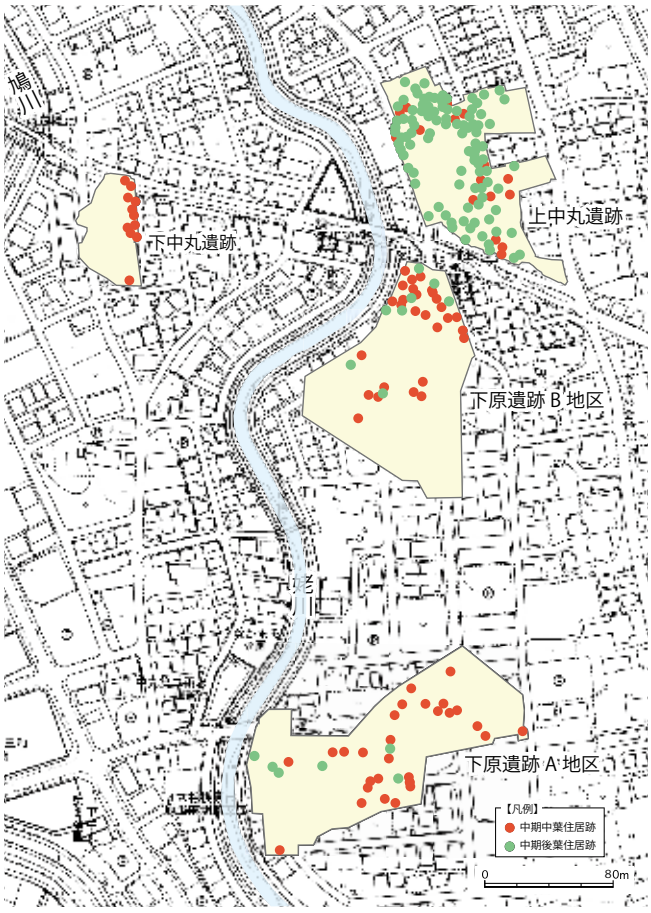
大規模土地区画整理事業に伴う調査の例としては、相模原市南区の姥川（うばかわ）流域の下溝遺跡群が挙げられます。下原（したはら）遺跡、上中丸（かみなかまる）遺跡、下中丸（しもなかまる）遺跡といった縄文時代集落が群在し、1986（昭和 61）年から相次いで発掘調査が行われました。その結果、上中丸遺跡と下原遺跡 B 地区の一部は、同一の環状集落を形成していることが明らかになるなど、8 期に渡る集落の変遷が捉えられています。

神奈川県下では、2000 年頃の段階で中期の遺跡が 300 箇所近く知られています。5,000 軒以上の住居跡が発掘調査され、東日本の縄文時代集落研究において、重要なデータを提供してきた地域です。

▲ 12　当麻遺跡の集落跡

▲ 13　当麻遺跡出土の土器

▲ 14　下原遺跡 A・B 地区の空撮写真

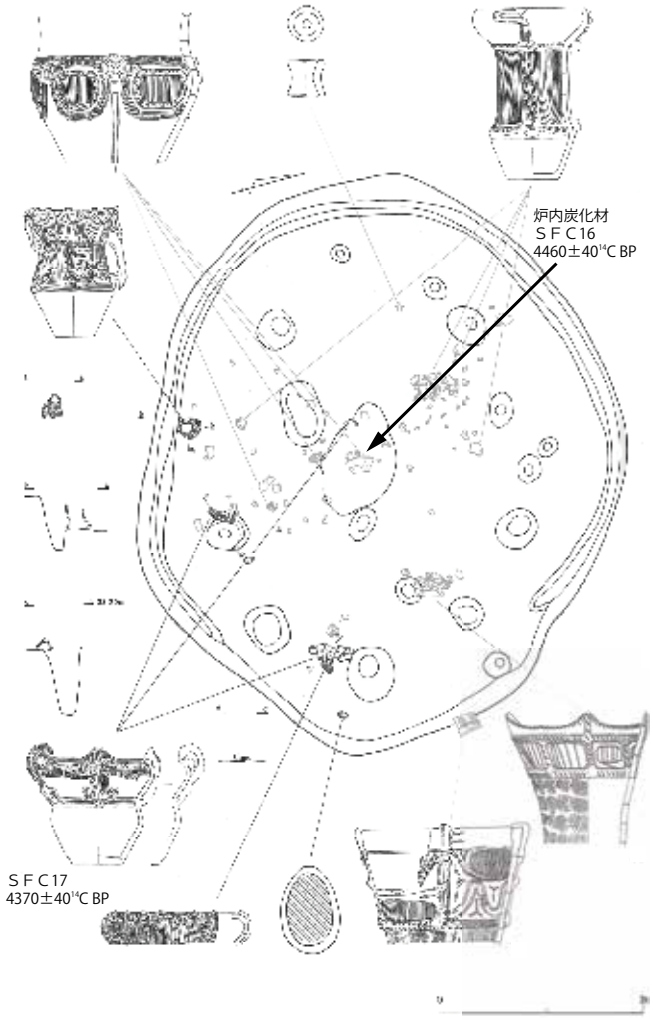


▲ 15　下溝遺跡群の集落展開図

集落の一時的景観の復元

1990年代に行われた慶應義塾大学の湘南藤沢キャンパス内遺跡（以下、「SFC遺跡」・藤沢市）の調査では、遺物の出土位置を全点記録し、その接合関係などから、同時存在する遺構を絞り込み、集落の一時的な姿を復元する作業に力が注がれました。住居の時期を決めるためには、出土する土器の年代観に頼る必要がありますが、土器の製作された年代と廃棄された年代の差、また土器よりも住居の存続期間が短いと想定されるなど、方法上の問題点が存在し、集落の一時的な姿を細かく見ていくことには、技術的な課題が残されています。

SFC遺跡では、遺物の出土状況の詳細な記録とともに、放射性炭素14年代測定法による炭化物の年代測定結果を組み合わせることで、集落の各遺構が機能した段階（フェーズ）を明らかにする成果を挙げています。



▲16　SFC遺跡Ⅱ区4号竪穴住居跡の遺物出土状況

丹沢山麓の最新成果

丹沢山麓に位置する秦野市や伊勢原市では、新東名高速道路や厚木秦野道路（国道246号バイパス）の建設に伴い、2007（平成19）年以降、多くの発掘調査が行われています。調査事例がそれほど多くなかった丹沢の山麓部の縄文時代集落の様子が明らかになっており、柳川竹ノ上遺跡（秦野市）や稲荷木遺跡（秦野市）は、中期の環状集落としても注目されます。

また、神成松遺跡（伊勢原市）では、土偶装飾付き土器の破片が出土するなど、県内でも事例の少ない遺物が出土しており、今後の発掘調査成果にも期待されます。

▲17　稲荷木遺跡の全景と出土した中期の土器
水無川左岸の河岸段丘に集落が広がる。

▲18　柳川竹ノ上遺跡

遺跡を残し、伝える。

経済成長の波の中、たくさんの発掘調査が行われるようになりました。しかしそれは、開発とともに遺跡が姿を消していくということも意味しています。その中でも、現状保存され、後世に遺跡の価値が伝えられることになった遺跡を紹介しましょう。

「勝坂遺跡」勝坂式土器のふるさと

勝坂遺跡（相模原市南区）は、縄文時代中期の勝坂式土器設定の基準となった標式遺跡として著名な遺跡です。その調査の歴史は古く、1926（大正 15）年には、陸軍軍人で考古学者でもあった大山柏の大山史前学研究所による調査が行われています（後の A 区）。太平洋戦争の戦火により、不幸にもその発掘資料は焼失してしまいますが、多量の打製石斧の出土が、縄文時代に農耕が行われたことの証拠として注目されたことは、縄文時代の生業研究において重要なことです。

1970 年代になると、勝坂遺跡周辺にも、市街化の波が押し寄せ、住宅地の建設などにより、遺跡は破壊の危機に直面しましたが、市教育委員会による試掘調査などにより、縄文時代中期の集落跡が良好に残っていることが確認されたため、勝坂遺跡は 1974（昭和 49）年 7 月に国史跡に指定をされます。指定の際には、研究者や市民が一体となった保存運動が展開され、大きな力になりました。

勝坂遺跡には複数の中期集落が含まれますが、公園として整備されている D 区は、北集落と南集落からなる中期後葉（加曽利 E 式期）の集落であることが分かっています。2001（平成 13）年からは、史跡整備のための 2 期 6 年の発掘調査が行われ、調査成果に基づき、中期の土葺き屋根と笹葺き屋根の竪穴住居 2 棟が現地に復元され、縄文〈ムラ〉を体感できる公園になっています。2024（令和 6）年には指定から半世紀の節目を迎えました。

▲ 19　土葺き屋根で復元されたⅡ期３号竪穴住居跡

▲ 20　勝坂遺跡公園

「川尻遺跡」晩期に続くムラ

相模原市緑区の川尻遺跡（川尻石器時代遺跡）は、県の谷ケ原浄水場周辺一帯に広がる遺跡で、国の史跡となっています。川尻遺跡の史跡指定は、1931（昭和 6）年のことで、床面に石を敷き詰めた敷石住居跡の発見が契機でした。敷石住居跡の発見は、当時まだ目新しく、石を敷き詰めるという特異な様相に学界の関心が強く持たれたこともあり、同時期の 1930（昭和 5 ）年には寸沢嵐石器時代遺跡（相模原市緑区）、1934（昭和 9 ）年には伊勢原八幡台石器時代住居跡が、県内で相次いで国史跡に指定されています。

史跡指定以前の 1928（昭和 3 ）年に「尚古会」という 150 名を超える組織が地元住民を中心に設立され、遺跡の保存等を目的として活動していたことは特筆されます。遺跡に対する地元の大きな理解と協力により、現代まで遺跡が守られてきました。川尻遺跡はその後、縄文時代中期～晩期の集落が保全されるよう 4 回の追加指定により、指定範囲が拡大されてきました。集落の変遷が分かる大規模な遺跡です。

▲ 21　川尻遺跡

▲ 22　川尻遺跡 J3 号住居跡出土土器（中期中葉）

「道場窪遺跡」河川漁撈を語るムラ

綾瀬市の西部を流れる目久尻川の左岸には、道場窪遺跡があります。1998（平成 10）年に市のリサイクルプラザ建設のための発掘調査が行われました。この調査により、縄文時代中期の竪穴住居跡 28 軒など、中期集落が良好な形で検出され、漁網のおもりとして利用された石錘や土器片錘といった河川漁撈の様子がうかがえる遺物などが出土しました。集落の半分以上が、まだ調査地の周辺に残っていると考えられ、綾瀬市域における縄文時代中期の人びとの暮らしや生活環境を考える上で貴重な遺跡であることから、2024（令和 6 ）年 3 月に綾瀬市の指定史跡となっています。

▲ 23　道場窪遺跡の竪穴住居跡群

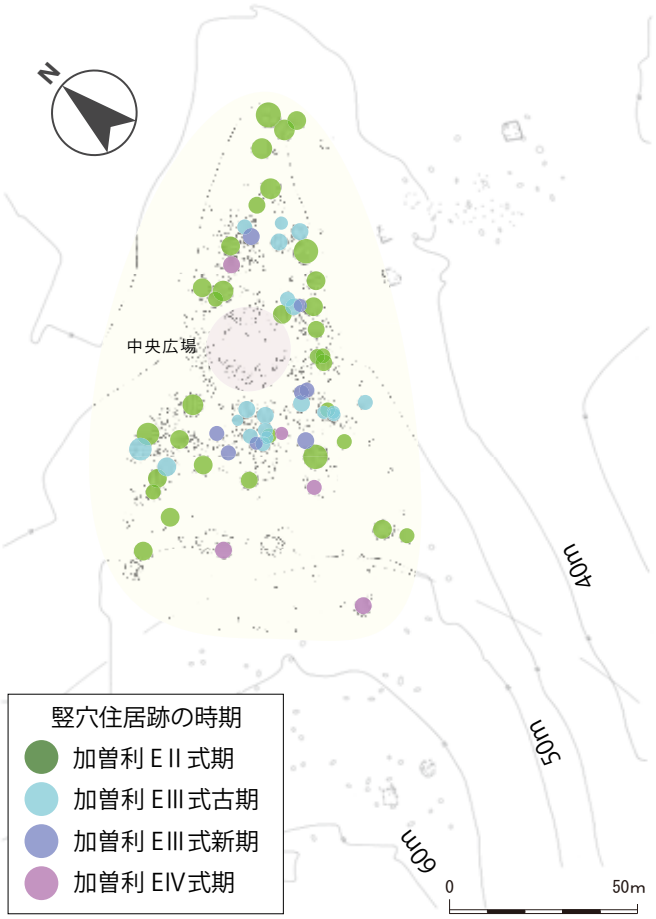
▲ 24　道場窪遺跡 10 号住居跡出土遺物（中期後葉）
【綾瀬市指定文化財】

Ⅱ．縄文時代中期集落〈ムラ〉のすがた

縄文時代の集落〈ムラ〉の姿はどのようなものだったのでしょう。県内の代表的な遺跡を概観しながら、その姿に迫ってみることにしてみましょう。

環状になるムラ

港北ＮＴ遺跡群のひとつ二ノ丸遺跡（横浜市都筑区）は、中期後葉（加曽利Ｅ式期）を中心とした遺跡で、100 軒を超す竪穴住居跡が見つかりました。最終的な集落の配置図を見ると、住居が台地の縁をめぐるように約 100 × 40 ｍの楕円形状に分布しています。このような円環状の配置になる集落は環状集落、あるいは馬のヒヅメに似た形から馬蹄形集落と呼ばれてきました。



▲25　二ノ丸遺跡の全体図

▲26　二ノ丸遺跡の竪穴住居跡群

阿久和宮腰遺跡（横浜市瀬谷区）は、中期中葉～後葉（勝坂式期～加曽利Ｅ式期）に継続的に営まれた集落です。このような継続的な環状集落は、住居が内側に重ねて作られ、集落の環が徐々に小さくなる傾向にあることが知られています。一方、集落の中央部分は広場のように空閑地が確保され、住居が作られる場所は最終的にドーナツ状の形となります。住居を自由な場所につくるのではなく、集落の形成にも何らかの社会的な決まり事が存在していたと考えられます。

▲27　阿久和宮腰遺跡　住居跡が環状にめぐる。

▲28　阿久和宮腰遺跡 53 号住居跡
竪穴住居跡に少し土が埋まり、窪地となったところに土器が捨てられている。

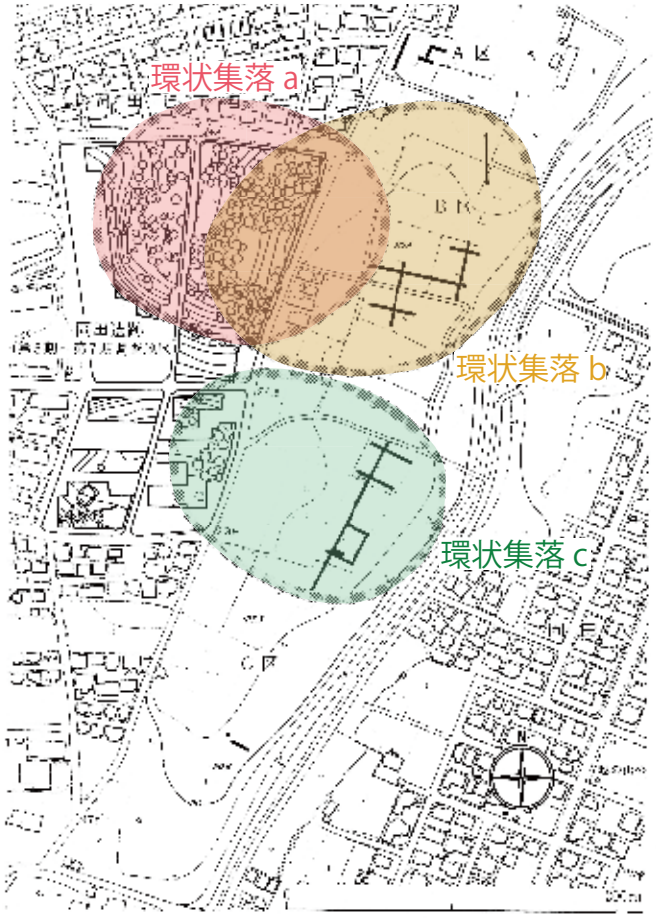
▲29　阿久和宮腰遺跡出土土器
（中期後葉）
胴部が張り出す特異な器形。

集落の環が複数連なるような集落も存在します。杉久保遺跡（海老名市）は、現在の東名高速道路海老名サービスエリアを望む台地上に作られた集落で、２つの環状集落が接するように見つかっています。中期中葉～後葉（勝坂式期～加曽利Ｅ式期）にかけて継続した集落ですが、その主体が北側のムラから南側のムラへと徐々に移動している傾向があるようです。

岡田遺跡（寒川町）は、相模川右岸を代表する遺跡で、全国的にも珍しく３つの集落の環が連なると考えられている巨大集落です。1982（昭和 57）年以降、大規模な発掘調査が遺跡の西側を中心に行われ、中期中葉～後葉（勝坂式期～加曽利Ｅ式期）の住居跡が 600 軒以上調査され、県内屈指の規模を誇っています。集落からは、釣手土器が多く見つかっていることが特筆されます。

▲30　杉久保遺跡

▲31　杉久保遺跡出土土器（中期中葉）

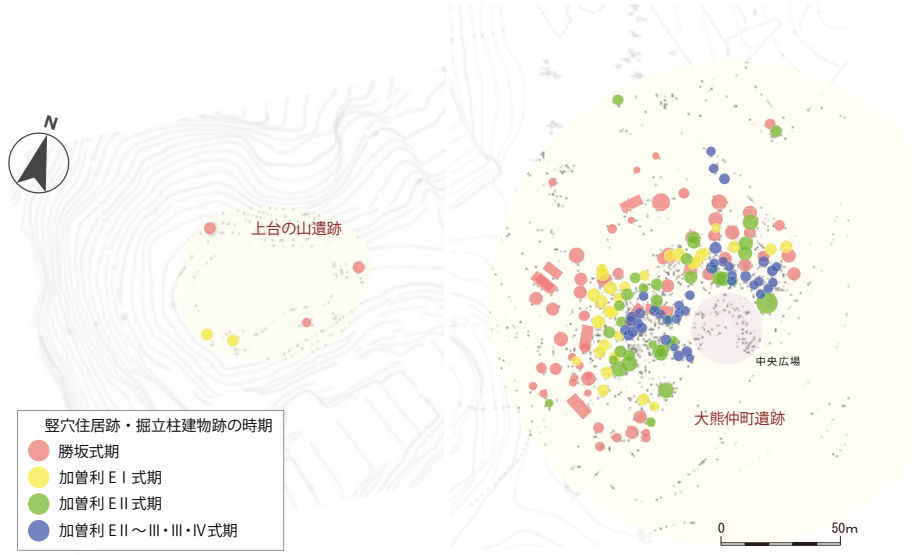


▲32　岡田遺跡の集落展開図

「大きな」ムラ・「小さな」ムラ

大熊仲町遺跡（横浜市都筑区）は、環状集落の半分が調査前に失われていたものの、中期中葉～後葉（勝坂式期～加曽利Ｅ式期）の住居跡 170 軒以上からなる港北 NT 遺跡群を代表する集落のひとつで、環状集落の直径も大きく約 120 ｍの大きさです。

その大熊仲町遺跡から南西側に続く台地上には、70 ｍほど離れて上台の山遺跡が位置しています。大熊仲町遺跡に比べると集落に作られる住居は少なく、中期中葉～後葉（勝坂式期～加曽利Ｅ式期）の竪穴住居跡が５軒だけという「小規模」な集落ですが、住居跡が台地の縁を巡るように位置し、環状を意識したような配置になっていることは注目されます。

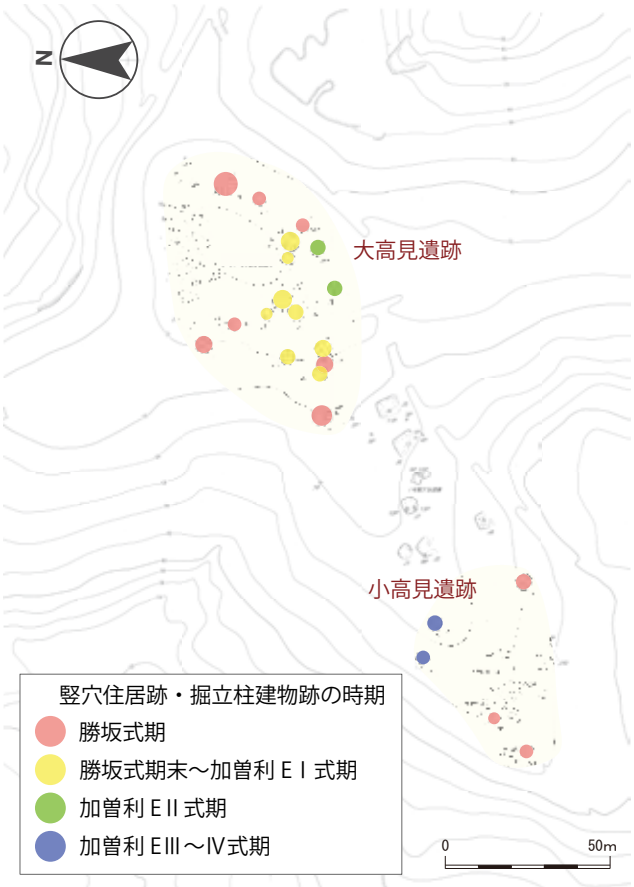


◀33　大熊仲町遺跡と上台の山遺跡の集落展開図

港北 NT 遺跡群の大高見遺跡、小高見遺跡も比較的規模の小さな遺跡です。大高見遺跡と小高見遺跡は、同じ丘陵上に隣接して立地しています。周辺の丘陵上は、小丸遺跡、高山遺跡、前高山遺跡、三の丸遺跡と環状集落が連なる地域ですが、大高見遺跡と小高見遺跡は、集落の形成が断続的で、同じ時期に作られた住居の数も多くありません。また、住居が重複して作られることもほとんどありません。

何が原因でこうした集落規模の違い発生するのか明確ではありませんが、「大規模」集落の姿は長年の累積による最終的な形態を反映していることに注意が必要です。「大規模」集落の一時的な姿は、「小規模」集落とほとんど変わらない可能性も考えられます。

「小規模」集落も、周囲の環状集落と無関係であったとは考えにくく、それぞれの集落は独立した個別の集団の居住地ではなく、ひとつの集団が、地域全体の中で、分散や移動を繰り返していたとも考えられています。このような「小規模」集落の存在は、環状集落の形成過程を理解する上で、重要な手がかりになる可能性を持っています。



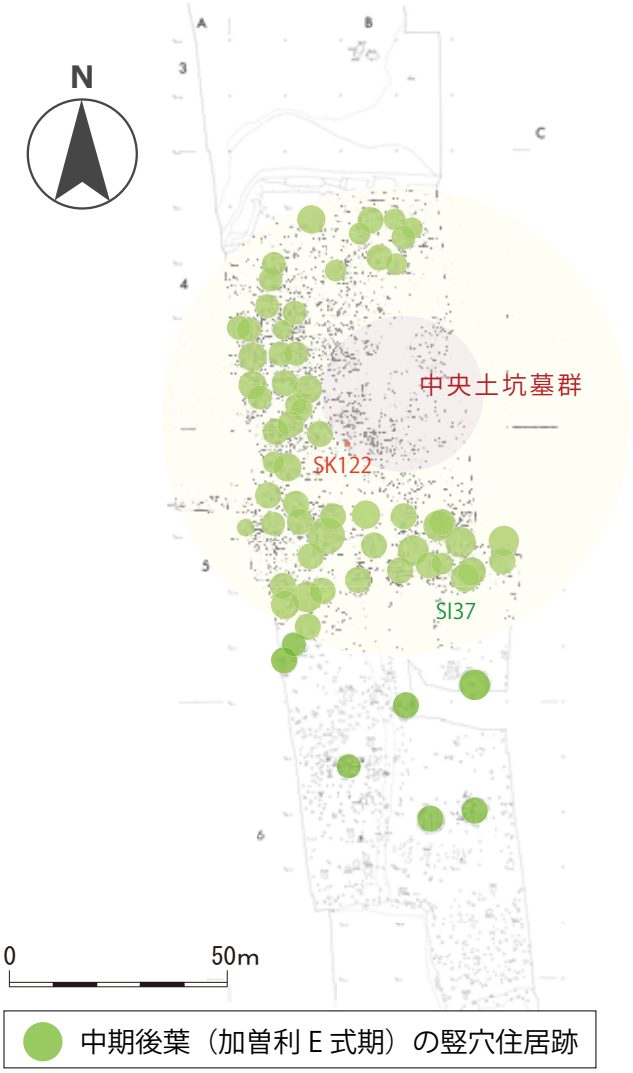
▲34　大高見遺跡と小高見遺跡の集落展開図

ムラの中央の墓

多くの環状集落では、集落の中央部分は住居跡が作られない広場空間として維持されていました。

東京と神奈川の都県境を流れる境川流域の大集落のひとつに橋本遺跡（相模原市緑区）があります。国道16号（八王子バイパス）改築工事に伴い、1980（昭和55）年から調査が行われ、中期後葉（加曽利E式期）の環状集落跡が見つかり、土偶や土製品がとても多く出土していることでも知られる遺跡です。住居跡は円環状の配置となる一方、住居に囲まれた集落の中央の広場空間には、穴を掘って埋葬施設とした土坑墓が多数見つかっています。すべての集落ではないものの、多くの環状集落の中央にこのように墓域が形成されています。集落のなかに墓を取り込む構造は、縄文時代集落のひとつの特徴と言えます。

▲35　橋本遺跡のSK122の土器出土状況



▲36　橋本遺跡の全体図
道路建設に伴う南北に長い調査区の結果、集落西半分が姿を現した。集落の直径は、約90mと比較的小さいが、環状にめぐる住居域とそれに囲まれる土坑墓群の構造が良く分かる。

宮添遺跡（川崎市麻生区）は、川崎市を代表する縄文時代集落のひとつで、黒川地区の区画整理事業に伴って発掘調査が行われました。中期後葉（加曽利E式期）が主体となる集落の中央部分からは、墓と考えられる土坑群が見つかっています。土坑内からは土器が逆さまの状態で据えられた倒置土器が見つかったものが複数あり、埋葬した遺体の頭部に土器を被せるという風習があったことを示しています。

東開戸遺跡（秦野市）の12号土坑からは、まさに被せられた土器の中から、頭骨が出土しています。

▲37　東開戸遺跡の12号土坑の土器・頭骨出土状況

土坑墓に供えられた土器と石匙

土坑墓からは副葬品も見つかります。天神山遺跡（小田原市）は、小田原城跡の南側、箱根火山から東にのびる丘の先端部付近に位置する遺跡です。中期中葉（勝坂式期）の土坑墓群が調査され、副葬品と考えられる土器や石匙が出土しています。また、7つの土坑から石匙が出土しましたが、そのうちのJ9号土坑では、供えられた石匙の脇に埋葬された人骨が残存していました。

このような副葬品のあり方は、相模川右岸の恩名沖原遺跡（厚木市）でも確認されています。中期中葉～後葉（勝坂式期～加曽利E式期）にかけての環状集落で、集落中央の勝坂式期の土坑墓群からは、副葬品と考えられる土器や石匙が出土しています。そのうち、114号土坑からは、大小5点の石匙が重なった状態で出土しています。

中期中葉（勝坂式期）には、こうした石匙を供える風習が認められます。

▲38　天神山遺跡のJ9号土坑の石匙・人骨出土状況

▲39　恩名沖原遺跡の114号土坑の石匙出土状況

◀40　恩名沖原遺跡のJ16号住居跡
住居の入口部分からは、逆さまに埋められた土器が出土した。出土した土器は2点で、深鉢の上に浅鉢が重ねられ、ともに底の部分には、穴が開けられていた。
埋甕と呼ばれる風習で、出産時の胎盤を埋め、子の成長を願ったなどの説がある。

屋外に埋められた土器（埋設土器）

中期後葉（加曽利E式期）の初めには、秦野・伊勢原市域で、屋外に単独で埋められた大形の土器（埋設土器）が確認されています。

太岳院遺跡（秦野市）の埋設土器は、大形の深鉢が逆さまに埋められた状態で出土しました。土器の口の部分が失われていて、底の部分に直径2㎝ほどの穴が開けられていました。

平沢同明遺跡でも、同様に大形の深鉢が逆さまに埋められた状態で出土しました。土器の頸から上の部分と底部付近が失われていて、土器を埋める際に意図的に打ち欠いた可能性が考えられます。これらの土器は、口縁を破壊する、底を打ち欠く、底に穴を開けるという行為により、土器本来のモノを入れる器としての機能を失っていると考えられます。

このような屋外に単独で埋められた大形の土器は、山梨県の甲府盆地を中心に見られる事例であることが知られ、成人を再埋葬した土器棺と考えられています。

▲41　太岳院遺跡 J2 号埋設土器（中期後葉）
高さ約 72 ㎝、胴部の最大径が約 47 ㎝の大形の深鉢が埋められていた。県内でも最大クラスの大きさの縄文土器である。

▲42　平沢同明遺跡 1 号埋設土器（中期後葉）
高さ約 61 ㎝、胴部の最大径が約 34 ㎝の大形の深鉢が埋められていた。穴を掘って埋められていることが、土の断面の観察により分かる。

列石で区画する

川尻中村（かわしりなかむら）遺跡（相模原市緑区）は、史跡川尻石器時代遺跡の南東側に近接する遺跡です。環状集落のほぼ中央部分が調査され、中期中葉～後葉（勝坂式期～加曽利 E 式期）の集落であることが明らかとなりました。中央の中期後葉（加曽利 E 式期）の土坑墓群の周りに、区画するように川原石を並べた環状列石（かんじょうれっせき）が発見されています。

▲43　川尻中村遺跡の環状列石
石の面を意識して、長短を組み合わせながら並べている

廃屋墓

北川貝塚（きたがわ）（横浜市都筑区）は、港北 NT 遺跡群にある中期中葉～後葉（勝坂式期～加曽利 E 式期）の環状集落です。調査では、家屋（かおく）の中に亡くなった人を埋葬する廃屋墓（はいおくぼ）から計 4 体の人骨が見つかっています。廃屋墓とは、縄文時代中期に関東地方を中心に見られる葬法で、複数の人骨がまとまって出土することもあり、当時の家族構成や婚姻（こんいん）関係などを明らかにする手がかりとなってきました。

北川貝塚の中期後葉（加曽利 E 式期）の J 71 号住居では、足を折り曲げた屈葬（くっそう）の状態で、頭の両側と下肢骨（かしこつ）の脇に礫（れき）が置かれ、横向きに埋葬された壮年（そうねん）女性の骨が見つかっています。

通常、骨は長い年月の間に分解されてしまうため、実際よりも廃屋墓の発見事例は少ないと考えられますが、北川貝塚の場合などは、住居内の貝塚の貝などのカルシウム分によって、骨が分解されずに残ったと考えられます。

◀▲44　北川貝塚の廃屋墓（左：J51 号住・右：J71 号住）

Ⅲ．縄文ムラ繁栄の背景

集落を取り巻く森と植物との関わり

クリとウルシ

縄文時代の中心的な食料のひとつと想定されているものが、堅果類です。なかでもクリは、腐りにくい木質で、また磨製石斧による伐採に適していることから、実を食べるだけでなく、建築材としても重用されたと考えられています。勝坂遺跡の西側の低地部、勝坂遺跡有鹿谷 D-1 地点で行われた花粉分析では、中期中葉の堆積物の中から、クリ花粉が 48％の高い割合で検出されました。クリは自然界では密集することはなく、その花粉の大半は樹冠の縁から約 20 m の範囲で落下することが実験的に確認されています。そのため、勝坂遺跡有鹿谷 D-1 地点周辺には、人の手によるクリ林が形成されていたような景観が想定されます。有鹿谷 D-1 地点のすぐそばの勝坂遺跡 D 地区では、中期中葉の集落が確認されていませんが、鳩川対岸の磯部宮際遺跡 E 地点で住居内の炉跡から燃料材として用いられたクリの炭化材が見つかっています。直接の関係は明確でありませんが、広くクリ材を利用した縄文時代の人びとの存在がうかがえます。クリ林が、中期のムラでの生活を様々な面から支えたことでしょう。

こうしたクリ林の存在からは、集落周辺の自然環境への積極的な関与がうかがえます。下草刈りなどの手入れや木の成育管理、種実の採取、燃料や建築材としての利用といった長期間に渡る縄文時代の人びとの森林への働きかけが見えてきます。

クリのほかにも、人の積極的関与が想定される植物として、ウルシを挙げることができます。大地開戸遺跡（相模原市緑区）では、漆液を入れる容器として使用されたと考えられる土器が、西富岡・向畑遺跡（伊勢原市）では漆塗りの土器が出土しています。漆製品の製作には、原料となるウルシの木の管理から漆器の元となる精緻な木器や土器の製作、ウルシを漉す布の製作など、様々な技術が必要となります。

▲45　大地開戸遺跡の漆液容器

◀46　勝坂遺跡の遺構分布図とクリ林推定地
西側の鳩川に向かう有鹿谷でのボーリング調査の結果、クリ花粉の高密度での分布が確認されている。

土器に残された種実圧痕

植物の種実やムシが、土器づくりの際に粘土の中に混じり、小さな穴（圧痕）として土器の表面などに残ることがあります。その圧痕を型取りして、顕微鏡などで観察し、何の痕跡なのかを特定する手法が確立され、大きな成果を挙げています。土器づくりの場にあった種実などが土器に封じ込められ、それが痕跡として残っているということは、その種実などが、確実にその時代に存在していたということを証明できる点で大きな意義があり、まさにタイムカプセルのようです。近年、縄文時代を支えた重要な植物として注目を集めている植物が、ダイズなどのマメ類です。

勝坂遺跡Ｄ地区出土の土器からは、悉皆的な圧痕調査により、ダイズ属、シソ属（シソ・エゴマ）、クリなど、多数の圧痕が見つかっています。

このほかに三保中通遺跡（横浜市緑区）と下原遺跡（相模原市南区）でシソ属、大日野原遺跡（相模原市緑区）でアズキ亜属、三田林根遺跡（厚木市）でダイズ属などの圧痕が見つかっており、縄文時代の多様な植物利用が分かってきました。

▲47　勝坂遺跡Ｄ区のダイズ属圧痕が残る土器

▲48　三田林根遺跡のダイズ属圧痕が残る土器

▲49　三保中通遺跡のシソ属圧痕が残る土器
土器表面の小さな粒々がその痕跡

鱗茎

また、鱗茎類が炭化した状態で出土することがあります。鱗茎とは、ユリ根やタマネギのように植物が地下に養分を蓄えて球根状となったもので、阿久和宮腰遺跡（横浜市瀬谷区）や上粕屋・和田内下遺跡（伊勢原市）では、焦げた鱗茎が土器にこびりついた状態で出土しています。アクや毒があるため、生のままでは利用が難しい鱗茎を土器で煮ている途中で、焦がしてしまったものでしょうか。出土した鱗茎は、主食となるような植物ではありませんが、縄文時代の人びとが有用植物に対して、広い知識を持ち合わせていた証拠と言えます。

▲50　炭化鱗茎（左：阿久和宮腰遺跡・種別不明、中：上ノ入遺跡・キツネノカミソリ、右：上粕屋・和田内下遺跡・ツルボ）

打製石斧

中期のムラから多量に出土する打製石斧は、土掘りの用途が考えられている石器で、縄文時代に農耕が行われた根拠にもなってきました。圧痕研究による植物利用の状況からは、除草に用いられた可能性も指摘されています。

生麦八幡前遺跡（横浜市鶴見区）や万福寺遺跡群№4遺跡（川崎市麻生区）では、打製石斧が複数本まとまって出土し、石斧を揃えて保管していたような状況が見つかっています。

かつては、縄文時代の人びとは、その日暮らしの狩猟採集民というイメージを持たれていましたが、特に東日本の縄文時代中期の人びとは、身の回りの自然に積極的に働きかけてきたことが分かってきています。森の豊かな恵みが、縄文時代中期の繁栄を支えていました。

▲51　生麦八幡前遺跡の打製石斧出土状況
竪穴住居跡の床面から打製石斧が向きを揃えた状態で、まとまって出土した（写真手前）。
柄についた状態で、複数本まとめて置かれたものだろうか。

低地での活動

縄文時代のムラは、通常、日当たりの良い開けた台地の上にありましたが、西富岡・向畑遺跡（伊勢原市）では、集落を横断する谷の底に近い部分から複数の穴（土坑）が見つかりました。土坑の中からは漆塗り土器のほか、木製容器やササなどの植物を編んだ編組製品が出土しています。

このような低地の利用は、気候が寒冷化したと言われる後期になって活発化する傾向にあり、西富岡・向畑遺跡の谷も、後期にはクリ材を用いた木組遺構が構築されるなど、継続的な利用が行われています。後期の積極的な低地利用の背景には、気候変動などに伴う利用植物の変化などが想定されていますが、中期の段階でその活動が始まっていたことが分かります。

▲52　西富岡・向畑遺跡の低地の谷底に作られた土坑
写真奥の土坑から漆塗り土器が出土している。

▲53　西富岡・向畑遺跡の漆塗り土器

▲54　西富岡・向畑遺跡の木製容器（クリ材）

海をのぞむムラ

海浜部に目を向けると、いくつかの集落や貝塚が調査されています。油壺遺跡（三浦市）は、三浦半島先端部付近の相模湾に向かって西側に突き出た台地の上に位置しています。1995（平成７）年の調査では、中期中葉から末葉（勝坂式期～加曽利Ｅ式期）にかけての５軒の竪穴住居跡が見つかっています。漁網のおもりとして使われたと考えられる土器片錘、骨角器の研磨具とも推定される土製円盤が多く見つかっていることが特徴的で、軽石製の石製品などとともに海浜部の生業を反映しています。

▲55　油壺遺跡 10 号住居跡

中期には、70 以上の貝塚の存在が知られていますが、横須賀市の江戸坂貝塚や吉井貝塚では、漁に用いられたと考えられる骨角器や貝製品が出土しています。また、赤色顔料で文様が描かれた彩文土器や貝輪などからは、当時の生活の彩りが伝わってきます。

▲56　吉井第一貝塚の調査風景

温暖化による縄文海進が終わり、海水面が現代とほぼ同じ水準になる中、海水面が高かった縄文時代前期に比べると海浜部に巨大集落が作られるという状況ではありませんが、海を巧みに利用した縄文人の姿が見えてきます。

謎の軽石製品

縄文時代、軽石は漁撈の際に浮子として使用されることがありましたが、三の丸遺跡（横浜市都筑区）と新戸遺跡（相模原市南区）では、不思議な形の軽石製品が見つかっています。いずれもおにぎりのような丸みのある三角形を基本としますが、三の丸遺跡のものは、長さ 12cm ほどの板状の部分にラッパのような口がついて容器状になるのに対し、新戸遺跡のものは、厚みのある軽石をくり抜いて容器状にしています。いずれも紐で吊り下げられるような孔が上部に開いていますが、両者が同じように使われたのかどうかは不明です。縄文時代の人びとは一体どのようにこれらの軽石製品を使ったのでしょう。

▲57　三の丸遺跡出土の軽石製品

▲58　新戸遺跡出土の軽石製品

多彩な交流

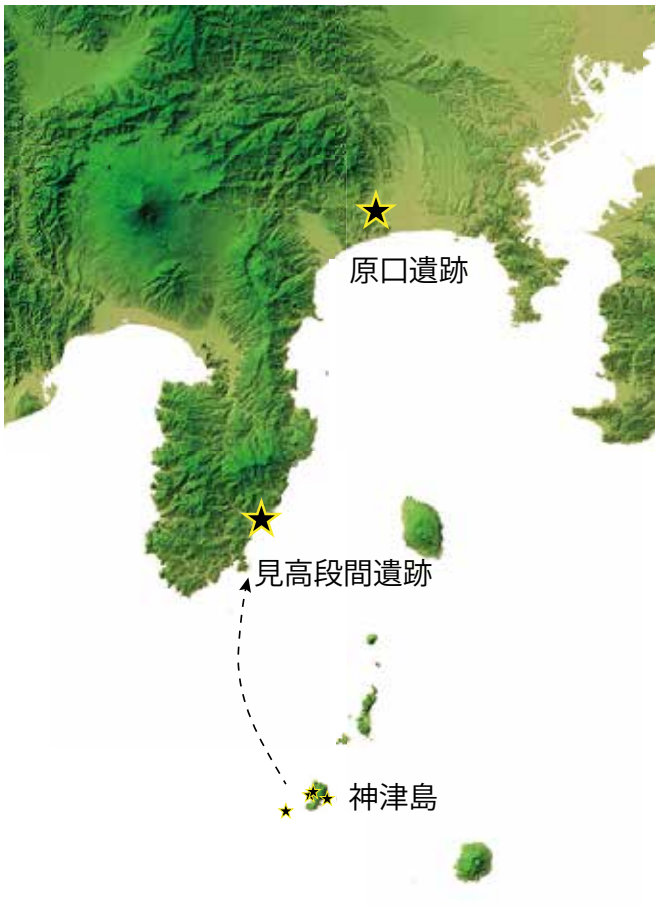
石器の石材の分析からは、それぞれの地域が独立して存在していたのではなく、ムラとムラ同士が地域を越えてつながりを持ち、関係を持っていた状況も見えてきます。科学的手法により産地の特定が進む黒曜石や、産地が限られるヒスイやコハクからは、海や山といった地理的障害をものともしない縄文時代の人びとのたくましい遠隔地交流の様子がうかがえます。

黒く光る石の軌跡

石鏃をはじめとする石器に利用された黒曜石は、遺跡から豊富に出土します。科学的分析により、原産地を推定することが可能で、産地から消費地へのモノの移動を検討するのに優れた対象と言えます。関東甲信地方の代表的な産地として、信州（和田峠・諏訪など）、神津島、伊豆天城、箱根、高原山（栃木県）などを挙げることができます。

特に神津島産の黒曜石は、丸木舟で海を渡って持ち込まなければならないものですが、神奈川県内の遺跡からも多く見つかり、中期中葉までは積極的に利用されています。

神津島産黒曜石の流通を考えるうえで注目される遺跡が、伊豆半島にある見高段間遺跡（静岡県河津町）です。大量の神津島産の黒曜石が出土した中期初頭と後葉を主体とした集落として知られ、19.5 kgもの巨大原石が出土するなど、神津島産黒曜石の荷揚げ地として機能していた遺跡と推定されています。見高段間遺跡で荷揚げされた神津島産黒曜石は、その後、原口遺跡（平塚市）などの相模湾沿岸部の集落に持ち込まれ、関東各地へと流通していったことが推定されています。原口遺跡からは、黒曜石の原石や石核のほか、篦状石器と呼ばれる見高段間遺跡と共通する小型の石器が出土しています。また、見高段間遺跡出土の中期初頭の土器の胎土分析の結果からは、ほとんどの土器の産地が神奈川県西部の酒匂川上流域と推定されたことから、見高段間遺跡形成の背景に、神奈川県西部の人びとが関わっていた可能性が指摘されています。



▲59　神津島産黒曜石の荷揚げ地・見高段間遺跡

▲60　見高段間遺跡出土の神津島産黒曜石の原石

▲61　原口遺跡出土の篦状石器

緑と赤の石の軌跡

ヒスイは、新潟県の糸魚川市周辺が最大の産地となる硬質の石材で、縄文時代には垂飾りとして加工されました。特に緑色のヒスイは珍重され、概ね５cm以上の大きなものは、大珠と呼ばれています。神奈川県内では、１つの遺跡から複数のヒスイが出土することは稀であり、当時の人びとにとっても、貴重な石であることが理解されていたと推定されます。そのため、ヒスイは権威を示すような威信財として認識されていた可能性が考えられます。

阿久和宮腰遺跡では、環状集落の中央部分の土坑墓から、副葬品として納められたと考えられるヒスイ製の垂飾が２点出土しています。ムラの有力者が埋葬されていたのでしょうか。

一方、縄文時代の関東甲信地方に流通しているコハクは、大部分が千葉県銚子産のものと推定されています。東開戸遺跡（秦野市）では２つの土坑墓からコハクの大珠が見つかっています。長径が６cmを超える大きなもので、注目される事例です。このほか、上溝甲七号遺跡（相模原市中央区）でも土坑墓に副葬されたコハク製垂飾が見つかっています。

県内からはヒスイ、コハクの両方が出土していますが、出土量はヒスイが圧倒的に多いです。出土遺跡の分布からは、それぞれの石がどのようなルートで運ばれてきたかが推定でき、各地の遺跡を経由して、産地から消費地へ移動してきたことが分かります。

繁栄の時代を背景に、ムラの有力者が広域のネットワークを通じて貴石を手に入れる様子が垣間見え、社会のあり方を考えるうえで重要です。

▲62　ヒスイとコハクの流通経路推定図

▲63　東開戸遺跡のヒスイとコハク【秦野市指定文化財】

▲阿久和宮腰遺跡

▲南原遺跡（横浜市保土ヶ谷区）

▲望地遺跡（海老名市）

▲三田林根遺跡

▲上溝甲七号遺跡

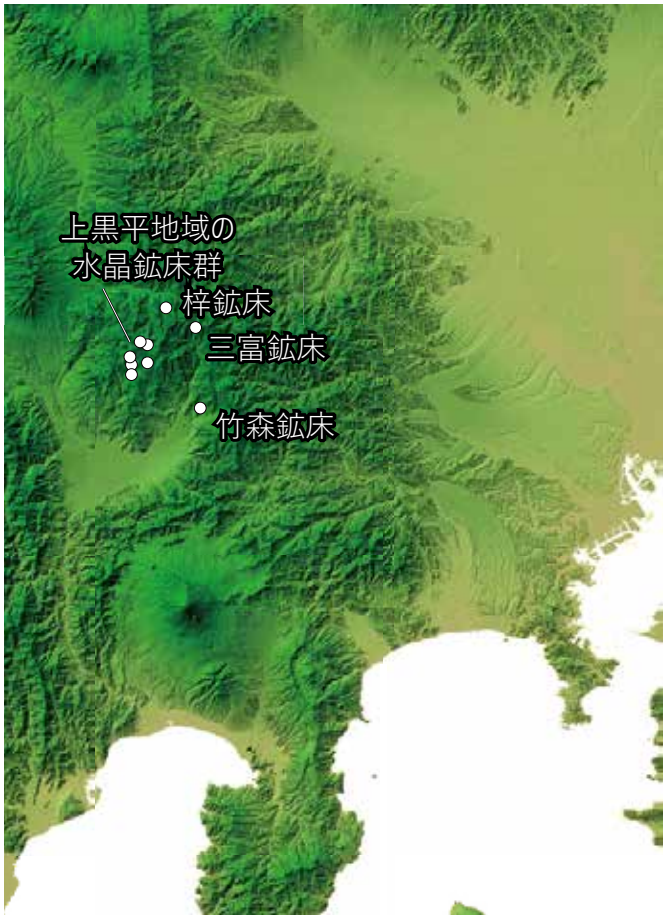
64　県内出土のヒスイとコハク

透明の石の軌跡

近年、原産地推定の方法が確立され、注目される石材が水晶（すいしょう）です。隣県の山梨県は、水晶の産地として知られ、水晶を加工した縄文時代の遺跡が甲府盆地などで見つかっています。神奈川県内では、吉岡（よしおか）遺跡群（綾瀬市）の旧石器時代の土層から水晶製の石器が見つかっており、古くから利用されている石材ですが、縄文時代中期では、相模原市内の遺跡で剥片（はくへん）が見つかっているものの、硬く加工がしにくいこともあり、利用は限定的であったようです。

今後、資料や産地分析の事例が蓄積され、水晶の利用の実態が明らかになることが期待されます。

▲65　水晶製剥片（左：下原遺跡、右：川尻中村遺跡）



▲66　甲府盆地周辺の水晶産出地

光り輝くブランド貝

石材のほかに遠方からもたらされたものの代表例として、南方（なんぽう）の暖かい海に生息する貝のオオツタノハガイが挙げられます。現生（げんせい）貝類の研究により、オオツタノハガイは伊豆諸島の八丈島（はちじょうじま）などで採れることが分かっていますが、波の荒い島の岩場に生息するため、この貝を手に入れることは容易なことではありません。

手首に装着するオオツタノハガイ製の貝輪は、青ヶ台（あおがだい）貝塚（横浜市金沢区）と宮の原（みやはら）貝塚（横浜市港北区）で出土しています。誰もが身に着けられるようなものではなかったと考えられ、社会の階層性を考えるうえで示唆（しさ）に富みます。

▲67　オオツタノハガイ製貝輪
（左：青ヶ台貝塚、右：宮の原貝塚）

▲68　オオツタノハガイの原産地と県内の出土遺跡

集落で行われた専業的な活動

石器づくりのムラ

磨製石斧は、縄文時代の木材加工に用いられた石器です。石材が豊富に採れる丹沢の山中にある尾崎遺跡（山北町）は、磨製石斧の生産をしたムラとして知られています。

原石となる川原石からの粗割り、石斧の形に整える剥離や敲打、表面を磨き上げる研磨といった各製作工程を示すような磨製石斧の未成品が、製作に使用された石槌や砥石とともに多量に出土しています。

川尻中村遺跡でも同様の磨製石斧などが見つかっており、石器製作が行われていたようです。

これらの遺跡は、山間部という立地を生かし、凝灰岩を中心とした豊富な石材を用いて磨製石斧を大量生産し、周辺のムラへと供給していたようです。

土器づくりのムラ

縄文土器を製作するのに欠かせない粘土を採掘した跡が、神奈川県と境川を挟んで対岸に位置する多摩ニュータウン（以下、「多摩 NT」）遺跡（東京都）で見つかっています。

多摩 NT 遺跡№.248 遺跡（東京都町田市）では、縄文時代の人びとが良質な粘土を採取するために掘った大きな穴が無数に見つかりました。採取された粘土は、縄文土器づくりに使用されたと推定されています。隣接する多摩 NT 遺跡№.245 遺跡（東京都町田市）の 51 号住居跡では、住居内に広がった粘土の下から、焼く前の状態の土器が見つかり、住居の中で土器づくりの工程の一部が行われていたと推定されています。また、№.245 遺跡から出土した浅鉢の破片が、粘土採掘坑のある№.248 遺跡出土のものと遺跡を越えて接合し、まさに№.245 遺跡に暮らす人びとが、№.248 遺跡のある山で粘土を採取し、ムラに戻って土器づくりをしていたことを具体的に示す貴重な事例となりました。

№.245 遺跡 51 号住居跡の未焼成土器の脇からは、台形土器（器台・台状土製品）が出土し、土器づくりの際に製作台として使用されていた可能性が指摘されています。神奈川県内でも、60 以上の遺跡で台形土器が出土しています。これらの遺跡からは、焼成粘土塊という何らかの原因で焼けてしまった不定形の粘土の塊が出土する傾向が見られます。焼成粘土塊には、縄文時代の人の生々しい指の跡や、土器づくりの工程を示すようなものがあり、土器づくりの様子を伝えてくれます。

▲ 69　尾崎遺跡の磨製石斧製作関連遺物
【神奈川県指定文化財】

▲ 70　多摩ニュータウン遺跡№.248 遺跡の粘土採掘坑

▲ 71　多摩ニュータウン遺跡№.245 遺跡の未焼成土器と台形土器

◀72　焼成粘土塊
左：川尻中村遺跡
右手で粘土をすくい上げたような指の跡が残る
右：原口遺跡
粘土紐をまとめて握り潰したような形

奥深き土製品の世界

縄文時代中期には、様々な土製品がみられ、この時期の特徴のひとつと言えます。耳飾などの装飾品、石器などを模した形のものなども見られますが、何に使われたのか、何を表しているのか分からないようなものもあり、縄文時代の人びとの心を表すとても奥深い世界です。

▲73　川尻中村遺跡の土製品（匙形・垂飾形・動物形）

土鈴

直径4cm前後の土玉の中に小さな玉が入れられています。完形のものは中をのぞくことができませんが、X線の透過写真により、小玉が入っている様子が分かります。振ると縄文時代の人びとも聞いたであろう、カラカラとした乾いた音が響きます。

▲74　阿久和宮腰遺跡の土鈴

三角柱状土製品（三角壔形土製品）

完形のものとしては、大熊仲町遺跡、神隠丸山遺跡、上中丸遺跡、田名花ヶ谷戸遺跡の事例が知られています。いずれも長さ10㎝に満たないほどの大きさで、長軸方向に穴が貫通し、表面に棒状の工具による沈線や刺突で、幾何学的な模様が描かれているものもあります。どのように使用されたのかは分かりませんが、北陸地方を中心に東日本の遺跡から出土することから、その意味は広く共有されていたものと考えられます。

▲75　三角柱状土製品（左：大熊仲町遺跡、右：上中丸遺跡）

小さな土器

一般的な土器よりもはるかに小さいミニチュア土器も作られます。粘土紐を積み上げる輪積(わづ)みによる通常の土器づくりと異なり、手づくねで作っているものも多く存在します。実用的なものとするにはずいぶん小さいもので、子どものおもちゃとする説や土器づくりの習作とする説もありますが、なかには赤彩(せきさい)されているものあり、日常とは異なる場面で使用されたと考えられます。

▲76　ミニチュア土器
（左：川尻中村遺跡。ミニチュア土器にも多様な形がある。中：上白根(かみしらね)おもて遺跡（横浜市旭区）。有孔鍔付土器だが、高さが６㎝ほどの大きさで、実用的ではない。内外面が赤彩される。右：宮添遺跡。赤彩され、外面に線刻で模様が描かれる。ペットボトルのフタと並べて撮影）

土器に描かれるいきもの

土器には、動物などのいきものと思われる表現が見られます。多くは抽象的に表現されていますが、中期中葉の勝坂式土器には、イノシシのほか、ヘビやカエルのような水辺に暮らすいきものが描かれているようです。これらの土器が単なる器ではなく、物語性を持ち、見せるために作られていたということが分かります

▲77　恩名沖原遺跡の浅鉢形土器【厚木市指定文化財】
土器の内面に粘土紐による隆帯(りゅうたい)で、魚を抽象的に表現していると考えられる。

▲78　黒川(くろかわ)№10遺跡（川崎市麻生区）の有孔鍔付土器
ヘビを表わしているとされる抽象文が正面に描かれる。
有孔鍔付土器の正面には、このような抽象文が配されることがしばしば見られる。

▲79　フクロウ形装飾（左：大地開戸遺跡、右：太岳院遺跡）
フクロウを模しているとされる深鉢形土器の把手・口縁部分

土器に描かれるヒト

林王子遺跡（厚木市）や大日野原遺跡（相模原市）からは、胴の部分にヒトが描かれた土器が出土しています。林王子遺跡の土器では、顔が分かる表現がされていますが、大日野原遺跡では、かなり抽象化されています。いずれも長く伸びた手の指先が三本指で、単純にヒトを表現したものというよりは、カエルなどの別のいきものと融合した姿を表していると考えられます。

▲80　林王子遺跡の人体装飾付き有孔鍔付土器【厚木市指定文化財】

▲81　大日野原遺跡の人体装飾付き土器【相模原市指定文化財】

顔面把手

また、中期中葉の勝坂式期には、深鉢形土器の把手部分に顔が表現された顔面把手と呼ばれるものがあります。多くは土器の内側を向けて付けられた把手中央の球体部分に顔が表現され、切れ長の目、よく通る鼻筋と鼻孔が目立つ鼻、開いた口など共通点がありながら、個性に溢れたユーモラスな表情をしているものが多くあります。

神奈川県内では、顔面把手は遺跡から多数出土することはなく、数が限られます。顔面部だけが単独で出土する例が多いことのほかに、意図的に顔面部が破壊されているものも散見され、ムラの中で故意に壊される行為があったと推定されます。

また、片目が潰れているようなものや、本来、顔がある部分の表現が省略されているものなど、土器製作時から顔の表現を不完全にすることを意識しているようなものも見られます。

▲当麻遺跡

▲阿久和宮腰遺跡（１遺跡で３点出土は県内では珍しい）

▲林大坂上遺跡（厚木市）

82　顔面把手

民族事例や出産の様子が表現された土器の存在などから、土器は母体と見なされていると解釈することもでき、顔面把手についても、そうした土器に秘められた母性や再生への思想が深く関わっていると考えられます。ユーモラスな表情には、縄文人の深い思いが込められているのです。

▲川尻中村遺跡

▲子母口富士見台遺跡（川崎市高津区）
顔面部が破壊されている

▲青ヶ台貝塚
片目は潰れ、片目はしずくのような形となる。

▲大熊仲町遺跡
顔面表現が省略され、のっぺらぼうとなる。

83　顔面把手

釣手土器

また、中期後葉を中心に出土する釣手土器は、その初期の形態のものは顔面把手がモデルとなって成立していると考えられています。釣手土器の中には、頂部に人面が表現されるものが存在するほか、釣手土器そのものが、ヒトの顔を表現しているようなものも存在します。

釣手土器は、内部にススが付着する事例が多く、灯りをともすランプとして使用されたと考えられていますが、神奈川県内では、一遺跡から出土する量が限られるため、特別な土器として、ムラ全体でのまつりなど、限られた機会に使われたものと考えられます。

▲84　下依知大久根遺跡（厚木市）の釣手土器

小さな土偶と祈り

土偶は女性を表現した人形の土製品で、妊娠や出産にかかわる道具と考えられています。県内からも多くの土偶が出土していますが、県内のどの遺跡からも満遍なく出土するのではなく、その出土には地域的な偏りが認められます。土偶を多く出土する遺跡は県北部の多摩丘陵から相模野台地の一部に位置する遺跡に集中します。中期後葉に特徴的な土偶は、小形の簡素なつくりで、正面から側面、背面に連続して細い線により文様が描かれます。脇腹から胸の下には複数の線による胸帯文、胸から腹にかけては正中線の表現と思われる縦線、背中にはX字状の表現と逆ハート形のお尻が描かれます。同じモチーフを表現した線刻文土器が寺原遺跡（相模原市緑区）で見つかっており、関連性が注目されています。

土偶は完全な形で出土することは稀で、バラバラに壊されることに役割があったと考えられていますが、川尻中村遺跡のように完形に近い状態で出土するものもあります。巻き上げた髪を表現しているのか、粘土紐により頭にハチマキ状の表現がされています。

石製の人形である岩偶も大熊仲町遺跡や下原遺跡で出土していますが、その出土量は土偶と比べると極めて少なく、土偶と同じような役割を果たしていたのかどうか、検討が必要です。

▲85　線刻文土器（寺原遺跡）【相模原市指定文化財】
土偶と同じモチーフが線刻により施文される

▲86　土偶（下森鹿島遺跡・相模原市南区）

▲87　土偶（宮添遺跡）

▲88　土偶（原口遺跡）

▲89　土偶（川尻中村遺跡）

▲90　土偶（川尻中村遺跡）

大きな石棒と祈り

石棒も精神文化を物語る代表的な遺物のひとつです。男性器を模したとされる石製品で、県内では、中期中葉後半には片手で持つのが困難なほどの大形の石棒が出現します。中期～後期の石棒製作遺跡である塚田遺跡（南足柄市）では、角柱状の自然石から成形される工程が明らかにされており、縄文人が多大な労力を掛けて石を打ち欠き、研磨し、製作したことが分かります。石棒の先端部付近には、立体的な彫刻が施されることもあり、恩名沖原遺跡（厚木市）では、円形の陽刻のある石棒が出土しています。

大形石棒がどのように使用されたのか、具体的なことはほとんど分かりませんが、石棒を火にかけた痕跡は多く認められます。市ノ沢団地遺跡（横浜市旭区）では、強く焼け爆ぜたため、かなり細かな破片に割れた状態になっています。ほかにも大形石棒を意図的に分割破壊する行為が見られ、また、破壊した後の石棒を敲く、磨くといった二次的に手を加える事例もあり、石皿のように平滑に凹んでいるものや、蜂の巣のように穴が開いた多孔石状のものも認められます。

石棒も土偶と同じように子孫繁栄を祈るために使用された道具と推定されます。子孫を残すことは、集団の存続や労働力の確保に直結することで、縄文時代の繁栄を精神的な面から支えていた道具と言えるでしょう。

▲91　大形の石棒
（左から：陽刻のある石棒（恩名沖原遺跡）、細かく破砕された石棒（市ノ沢団地遺跡）、石皿状に凹んだ石棒と輪切り状に意図的に分割された石棒（初山遺跡・川崎市宮前区）、多孔石状の石棒（大熊仲町遺跡））

縄文ムラ繁栄の終わり

むすびに

繁栄を極めた縄文時代中期の環状集落も、大半は中期末で途絶えて解体してしまいます。しかしながら、中期末の環状集落の解体は、環境の変化に適応した生存戦略の結果ともみられています。中期末から後期初頭を経て、後期前葉には再び環状集落がつくられるなど、環境の変化に適応し、後期社会が華開くことになります。

縄文時代中期の生活様式のほとんどは、現代の日本の生活にそのまま息づいているわけではありません。しかし、例えば、有用植物の特性を理解し、管理、活用するあり方は、その後、弥生時代中期以降にかながわの地で、農耕を基盤とする社会を受け入れる素地になったと考えられます。

縄文時代中期の生活には、現代の人たちが失ってしまったものが溢れ、四千年以上の月日を経ても、大きな魅力が感じられるように思います。現代社会は、縄文時代の生活に戻ることはできませんが、持続可能な社会が模索される今、彼らの生活から私たちが学ぶべき事はたくさんあるのではないでしょうか。

❖挿図の出典❖

1　勅使河原 2013 に藤沢市教育委員会生涯学習課 2009 の年代観を参照して作成
8　国土地理院デジタル色別標高図を基図に作成
15　中山ほか 2018 をもとに作成
16　調査報告書および藤沢市教育委員会生涯学習課 2009 をもとに作成
59　国土地理院デジタル標高地形図・色別標高図を基図に池谷 2005 をもとに作成
62　国土地理院デジタル標高地形図・色別標高図を基図に栗島 2019 をもとに作成
66　国土地理院デジタル標高地形図・色別標高図を基図に金井ほか 2023 をもとに作成
68　国土地理院デジタル標高地形図・色別標高図を基図に忍澤 2024 をもとに作成
5・19・25・32・33・34・36・46　各報告書・市町史から作成
裏表紙　国土地理院デジタル標高地形図「東京」を基図に白石編 1990 をもとに作成

❖写真の所蔵・提供元❖

公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター　9・10・11・26・44
川崎市教育委員会　6
相模原市立博物館　14・20・21・35・75 右・81・85
横須賀市自然・人文博物館　56
平塚市博物館　2（上ノ入）・50 中
小田原市教育委員会　38
海老名市教育委員会　30
綾瀬市　23
秦野市教育委員会　37・41・42
三浦市　55
東京都教育委員会　70・71
公益財団法人かながわ考古学財団提供　17 上・18・52
玉川文化財研究所　27・28・39・40
武井則道氏　3

❖出土品の所蔵❖

公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター　29・49・50 左・57・64（阿久和宮腰）・67・74・76 中・82 中・83 左下・83 右下
横浜市歴史博物館　4・75 左・91（大熊仲町）
川崎市教育委員会　76 右・78・83 右上・87・91（初山）
相模原市立博物館　47・58・64（上溝甲七号）・65・67・75 右・83 左上・85・86
平塚市博物館　2（上ノ入）・50 中
厚木市　2（林南）・48・64（三田林根）・77・80・82 右・84・91（恩名沖原）
海老名市教育委員会　31・64（望地）
秦野市教育委員会 63・79 右
綾瀬市　24
河津町教育委員会　60
個人（相模原市立博物館寄託）　81

❖参考文献❖（発掘調査報告書等の報告及び関連する県市町村史は、紙幅の関係から原則として省略しました）

1　安孫子昭二　2011『縄文中期集落の景観』アム・プロモーション
2　池谷信之　2005『黒潮を渡った黒曜石・見高段間遺跡』新泉社
3　池谷信之　2009『黒曜石考古学』新泉社
4　石井寛　2010「縄文時代の遺跡群と地域集団ー港北ニュータウン地域の遺跡群研究から一」『横浜市歴史博物館紀要』VOL.14、横浜市歴史博物館
5　忍澤成視　2024『貝輪の考古学』新泉社
6　金井拓人ほか 2023「先史時代の資源としての山梨県産水晶」『山梨県考古協会誌』第 30 号、山梨県考古学協会
7　栗島義明　2019「大珠の佩用とその社会的意義を探る」『身を飾る縄文人』栗島義明編、雄山閣
8　小林謙一ほか編 2016『考古学の地平』Ⅰ、六一書房
9　小林達雄編　2008『総覧縄文土器』アム・プロモーション
10　住宅・都市整備公団港北開発局編　1997『港北ニュータウン四半世紀の都市づくりの記録』
11　白石浩之編　1990『神奈川県下における主要遺跡の分布とその問題点』かながわの考古学第 1 集、神奈川県立埋蔵文化財センター
12　高橋龍三郎　2007a「関東地方中期の廃屋墓」『縄文時代の考古学』9、小杉康ほか編、同成社
13　高橋龍三郎　2007b「縄文中期の社会構造」『縄紋時代の社会考古学』安斎正人ほか編、同成社
14　谷口康浩　2005『環状集落と社会構造』学生社
15　谷口康浩編　2012『縄文人の石神』六一書房
16　勅使河原彰　2013「縄文文化の高揚（前・中期）」『縄文時代（上）』講座日本の考古学 3、泉拓良ほか編、青木書店
17　長沢宏昌　1994「甲府盆地周辺にみられる縄文時代中期の土壙墓と土器棺再葬墓」『研究紀要』10、山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
18　永瀬史人ほか 2006「縄紋土器に描かれた土偶」『日本考古学協会第 72 回総会研究発表要旨』日本考古学協会
19　中村耕作　2019「釣手土器の生成・展開過程」『異形の造形：釣手土器と有孔鍔付土器』堤隆編、浅間縄文ミュージアム
20　中山誠二ほか 2018「シソ属果実を混入した縄文土器」『相模原市立博物館研究報告』第 26 集、相模原市立博物館
21　藤沢市教育委員会生涯学習課　2009『大地に刻まれた藤沢の歴史Ⅱ～縄文時代』
22　山田康弘　2015『つくられた縄文時代ー日本文化の原像を探る』新潮社
23　山本暉久　1992「縄文時代の集落」『神奈川県下における集落変遷の分析』かながわの考古学第 2 集、神奈川県立埋蔵文化財センター
24　山本暉久ほか 2001「神奈川県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会
25　吉川昌伸　2011「クリ花粉の散布と三内丸山遺跡周辺における縄文時代のクリ林の分布状況」『植生史研究』第 18 巻第 2 号、日本植生史学会

❖協力者・協力機関❖　（敬称略・順不同）

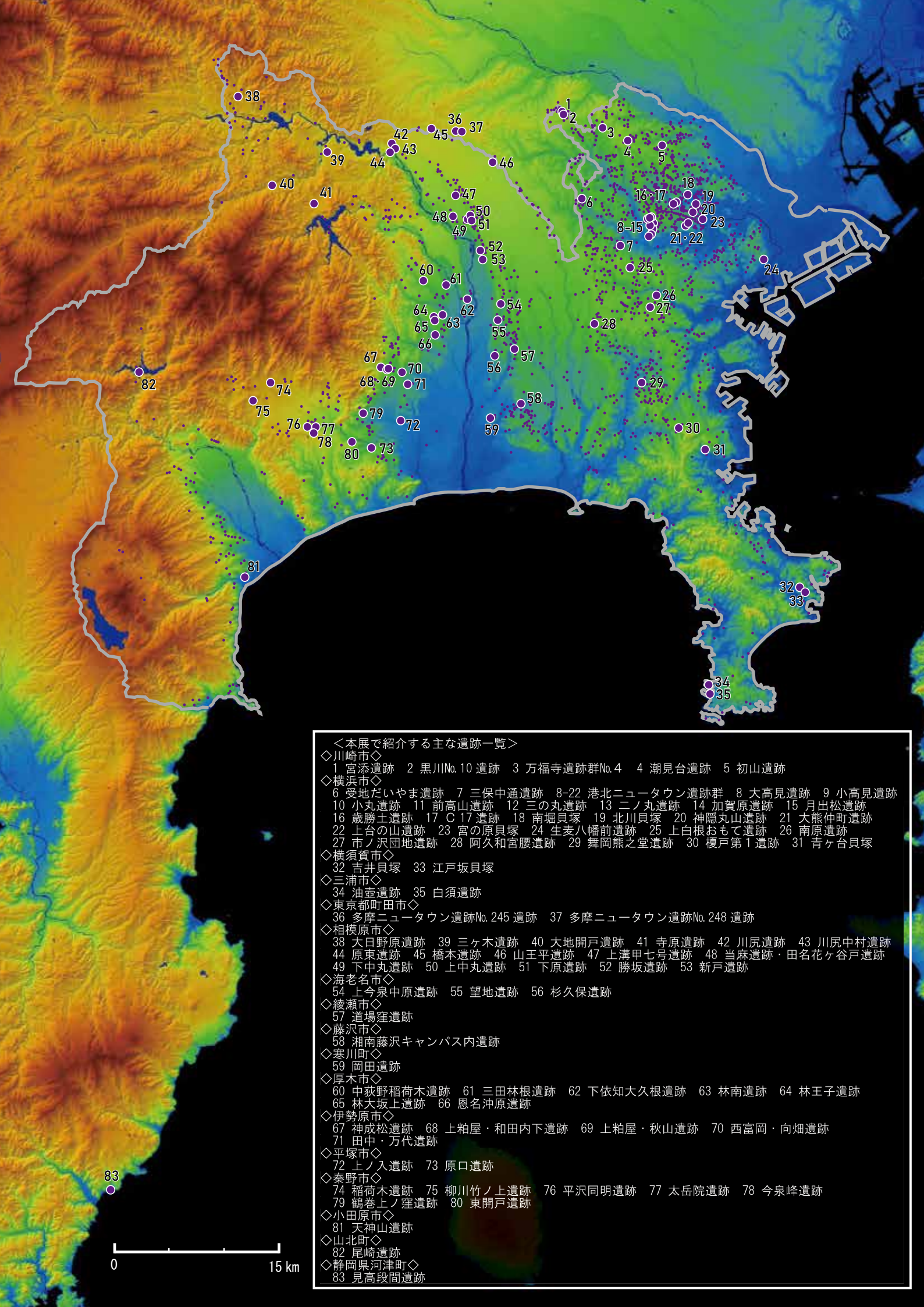
高橋龍三郎　谷口康浩　井出浩正　佐藤健二　中川真人　五十嵐睦
古屋紀之　中嶋友　櫻井はるえ　榊しおり　新井悟　長澤有史　正洋樹
萩野はな　新宮崇弘　加藤夏姫　坐古善光　田中勉　大倉潤　天野賢一
武内啓悟　和田山千暁　伊東はるか　小林秀満　長佐古真也　一之瀬敬一
小野英樹　安藤広道　原麗子　新開基史　新山保和　山田仁和　諏訪間直子
粕谷隆　齋藤葵　小川岳人　飯塚美保　相原俊夫　安藤文一　小川忠博
武井則道　公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
川崎市教育委員会　相模原市教育委員会　相模原市立博物館
横須賀市自然・人文博物館　平塚市博物館　小田原市文化財課
三浦市文化スポーツ課　厚木市文化魅力創造課　海老名市教育委員会
綾瀬市生涯学習課　寒川町教育委員会
公益財団法人東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センター
山梨県立考古博物館　河津町教育委員会　慶應義塾大学
慶應義塾湘南藤沢中等部・高等部　東洋英和女学院大学
公益財団法人かながわ考古学財団　玉川文化財研究所　寒川町観光協会

令和 6 年度　かながわの遺跡展

縄文ムラの繁栄

ーかながわ縄文中期の輝きー

発行日 2024 年 12 月 24 日
編　集 神奈川県教育委員会教育局生涯学習部
文化遺産課中村町駐在事務所
（埋蔵文化財センター）
発　行 神奈川県教育委員会
印　刷 株式会社 彩流工房



＜本展で紹介する主な遺跡一覧＞

◇川崎市◇
1 宮添遺跡　2 黒川No.10遺跡　3 万福寺遺跡群No.4　4 潮見台遺跡　5 初山遺跡

◇横浜市◇
6 受地だいやま遺跡　7 三保中通遺跡　8-22 港北ニュータウン遺跡群　8 大高見遺跡　9 小高見遺跡
10 小丸遺跡　11 前高山遺跡　12 三の丸遺跡　13 二ノ丸遺跡　14 加賀原遺跡　15 月出松遺跡
16 歳勝土遺跡　17 C17遺跡　18 南堀貝塚　19 北川貝塚　20 神隠丸山遺跡　21 大熊仲町遺跡
22 上台の山遺跡　23 宮の原貝塚　24 生麦八幡前遺跡　25 上白根おもて遺跡　26 南原遺跡
27 市ノ沢団地遺跡　28 阿久和宮腰遺跡　29 舞岡熊之堂遺跡　30 榎戸第1遺跡　31 青ヶ台貝塚

◇横須賀市◇
32 吉井貝塚　33 江戸坂貝塚

◇三浦市◇
34 油壺遺跡　35 白須遺跡

◇東京都町田市◇
36 多摩ニュータウン遺跡No.245遺跡　37 多摩ニュータウン遺跡No.248遺跡

◇相模原市◇
38 大日野原遺跡　39 三ヶ木遺跡　40 大地開戸遺跡　41 寺原遺跡　42 川尻遺跡　43 川尻中村遺跡
44 原東遺跡　45 橋本遺跡　46 山王平遺跡　47 上溝甲七号遺跡　48 当麻遺跡・田名花ヶ谷戸遺跡
49 下中丸遺跡　50 上中丸遺跡　51 下原遺跡　52 勝坂遺跡　53 新戸遺跡

◇海老名市◇
54 上今泉中原遺跡　55 望地遺跡　56 杉久保遺跡

◇綾瀬市◇
57 道場窪遺跡

◇藤沢市◇
58 湘南藤沢キャンパス内遺跡

◇寒川町◇
59 岡田遺跡

◇厚木市◇
60 中荻野稲荷木遺跡　61 三田林根遺跡　62 下依知大久根遺跡　63 林南遺跡　64 林王子遺跡
65 林大坂上遺跡　66 恩名沖原遺跡

◇伊勢原市◇
67 神成松遺跡　68 上粕屋・和田内下遺跡　69 上粕屋・秋山遺跡　70 西富岡・向畑遺跡
71 田中・万代遺跡

◇平塚市◇
72 上ノ入遺跡　73 原口遺跡

◇秦野市◇
74 稲荷木遺跡　75 柳川竹ノ上遺跡　76 平沢同明遺跡　77 太岳院遺跡　78 今泉峰遺跡
79 鶴巻上ノ窪遺跡　80 東開戸遺跡

◇小田原市◇
81 天神山遺跡

◇山北町◇
82 尾崎遺跡

◇静岡県河津町◇
83 見高段間遺跡